

## 「よるべなさ」再考

フロイトの生物学主義の展開と転回<sup>(1)</sup>

佐藤朋子

はじめに

「よるべない」と日本語でしばしば訳される「hillos」、そしてその名詞形であり「よるべなさ」と訳される「Hillosigkeit」という語は、ジグムント・フロイトの著作においてさまざまに文脈をとめないながら登場する。なかでも、飢えや渇きといった欲求を満足させるために外からの助けを必要とするという、幼児が<sup>(2)</sup>おかれている状況を指し示すために用いられる「よるべなさ」に対して、従来のフロイト研究は格別の関心を寄せてきた。<sup>(3)</sup> 本稿ではその関心を共有しつつも、他のものもろの用法や文脈も同時に十分に考慮することによって、「よるべなき幼児」の表象の錬成に備わる意義についてのあらたな仮説をフロイト独自の理論構築との関連において練り上げることを試みる。

以下では、三節をかけて徐々に焦点をぼりながらテクストを読みすすめてゆく。まず、(一) 一八九〇年代前半から一九三八年までのフロイトの多様な著作（症例研究、文化論、文学作品論、高度に理論的な論

考など)に「よるべない」あるいは「よるべなさ」の語が登場する様子を概観し、ついで、(二)うち、いくつかのテキストが論じている幼児の「よるべなさ」を、「外からの助けの介入」および「充足体験」という契機とともにそれが構成する三幅対の理論のなかで確認し、そして、(三)「心理学草案」(一八九五年)と『夢解釈』(一九〇〇年)がそれぞれに呈示するその「よるべなき幼児」の理論をさらに詳しく検討し、比較を通じて二つのあいだに差異をうかびあがらせることを試みる。

読解のなかでは、身体的欲求の前提に顕著に表れている、生物学への依拠ともみなされうるフロイトの態度に注目する。また、心理学的理論の構築において生物学的言説が介入する現場として「よるべなき幼児」を問う。最終的には、まさに現場としてそのひとつひとつを問うことを予想しながら、さらなる探究に向けてひとつの仮説を呈示したい。

#### 一 「よるべなさ」一八九三—一九三八年

フロイトのドイツ語全集は、一八八〇年代後半のテキストから数点選ばれているものの、おおむね一八九〇年前後から一九三八年までの著作物を網羅して所収している。<sup>4</sup> ほぼ同じテキストを収めている英訳の呼称にならえば、それらはフロイトの「心理学的」著作を網羅しているといつてよいだろう。「よるべない」あるいは「よるべなさ」の語は、催眠療法の一実践とその成果についての一八九三年の報告にはじまり一九三八年の精神分析の概説書の草稿まで、その心理学的著作のそこかしこに、また空白期間をおくことなく登場する。本節では、いくつかの視点からその様子を眺め、複数の俯瞰図を描きながら、そのそこかしこの登場をある広がりとして捉えることを試みたい。

はじめに先行研究を参照することにしよう。

「Hilfos(igein)」という語については今までに多くの注釈がなされており、それらを利用してここで視点を得ることができる。<sup>(6)</sup> まず注目したいのは、その語が、「助け」を意味する「Hilfe」と「…がない」を意味する「los」を含んでおり、その成り立ちによって「助けがない」を含意することである。それに照らし合わせる時、フロイトの著作における「Hilfos(igein)」の登場について、暫定的にであれ、三つのケースを区別することができる。一つは、「助けがない」というその含意を展開して明らかに示す文脈をとまなうケースである。もう一つは、暗示的にその含意に送り返す文脈をとまなうケースであり、別の一つは、その含意が文脈としてほとんど形をとっておらず、むしろ、ある感情もしくは情動、気分としての「hilfos」の意味が文脈で支配的になっているケースである。加えて、「Hilfos(igein)」がドイツ語においてごく一般的に用いられることをとくに考慮したい。その考慮に基づいて、やはり暫定的にはあるが、フロイトの著作のうちにみられるもろもろの用法を二つの仕方に大別することができる。一方は、ドイツ語の使用者のだれにもありうるだろう語の用い方、術語的と呼ぶにはほど遠い仕方である。もう一方は、固有語法ともいべき仕方であり、これに関しては、次節でくわしくみる「よるべなき幼児」の定式化における用法が顕著な例となっている。

A・シュニヴィントのモノグラフは、とくに二つの点で特筆すべき先行研究のひとつである。つまり、そのモノグラフは、フロイトにおける「よるべなさ」の多義性を比較的幅広いテキストのなかで探索しており、かつ、その多義性が収斂するところを考察しているのである。著者が主張するところによれば、「よるべなさ」は厳密な意味での精神分析的概念ではない。<sup>(7)</sup> それは、「個体的軸」と「社会文化的軸」の区別に応じながら機能する「パラダイム」である。「個体的パラダイム」を代表しているのは「よるべなき幼児」であり、フロイトのテキストのなかでもとくに「心理学草案」(一八九五年)がその構造を詳述している。「社会文化

的パラダイム」としての「よるべなさ」は、成人の宗教的態度をめぐる洞察の枠組という役割においてとりわけはつきりと認められる。『ある錯覚の未来』（一九二七年）や『文化の中の居心地悪さ』（一九二九年）はその枠組を利用すると同時に、保護欲求の起源としての父性コンプレクスの指摘を通じて、その構造のさらに詳細な記述にとりこんでいる。A・シュニツァイントのこの読解は、「よるべなさ」をその確定しがたい語義において捉えるために、つねにかならず並存する二つの心理学として個人心理学と集団心理学を示しながらフロイトが堅持した区別を応用したものであると言える。同様に、たとえそれがフロイトの著作のうち「よるべなさ」の登場箇所すべてをとりあげていないとしても、二つの「パラダイム」とその生成を探るといふ展望のもとでそれらを踏査し俯瞰するという可能性をここで引き出すことができると考えられる。

右に加えて、観察記述と理論ないし理論的思弁の区別と仮に呼びうるもの（以下では省略的に記述と理論の区別とも記す<sup>⑩</sup>）に基づく別の視点も利用できるように思われる。具体的な応用を探りながら、その導入をここで試みよう。

いくつかの「よるべなさ」は、語の成り立ちに由来する「助けがない」という意味を明示的にしながら、無力でありお手上げであるという状況の記述の一部として登場している。ある文化論の一節には次のような一節がみられる。「自然は、「…」われわれが文化作業によって脱却しようと考えていた自分たちのひ弱さよるべなさを、あらためて我々の眼前に突きつける<sup>⑪</sup>」。別の場合には、ある感情もしくは情動、気分の記述より慎重に述べるならば、感じられたなにかの記述が行われている。たとえば、フロイトは、散歩中に意図に反して同じ通りに何度も行き着いてしまうという経験において「よるべなさ」と不気味さという感情<sup>⑫</sup>を自分が覚えたことを報告している。状況と感情（もしくは情動、気分）という、ここに試みた区別は、読み方によってはかならずしも明瞭でないかもしれない。そればかりでなく、両方の用途に依じているかぎりにおいて第三の場合を構成するように思われる例、つまり、状況と感情（もしくは情動、気分）の記述に同時に

あてられているようにみえる「よるべなさ」も少なからずある。たとえば、ある症例研究が呈示する生活史では、女性患者が「自分のよるべなさ、失われた幸せの埋め合わせを母親に与える能力が自分にはないという」ことを「…」実感した<sup>13</sup>」ことが記されている。また、性活動の発達についてのある所見では、幼い子どもが「よるべない自分を救ってくれ、自分の欲求を満足させてくれ、つまりは愛してくれるような人物たちがいる」ということを学ぶ<sup>14</sup>」ことが指摘されている。

「よるべなさ」の別のいくつかは、記述的とはいいたい仕方で用いられている。それらをここでは「理論」という語で標しづけて区別したい。二つ例を引こう。思弁的とフロイトが位置づけるテキストでは、心的審級としての「自我」が「超自我」と「エス」という他の二つの心的審級から「攻め立てられ」るならば「よるべない」ありさまになることが論じられている<sup>15</sup>。また、ある文化論が論じる<sup>16</sup>ところによれば、「神々に自分の保護をゆだねる」ように人を駆り立てている「成人のよるべなさ」は「幼児のよるべなさを継続させている」<sup>16</sup>。ここでいわれている「成人のよるべなさ」は記述的とみなしうるとして、それからさかのぼって過去のうちに指し示された「幼児のよるべなさ」を、同様の意味で記述されたものと呼ぶことはきわめて困難である。

これまでにみてきたことを考え合わせながら視点を練り直すことにしよう。二つ前の段落の最後では、記述された幼児のよるべなさを、そして直前の段落では理論的表象としての「幼児のよるべなさ」を認めることができた。その二つの「よるべなさ」の相互的な位置づけは、記述が理論に先行するという時間的な関係あるいは、具体的な記述の数々とその抽象化によって錬成される理論という関係を参照するだけでは十分に規定できない。別の言い方をすれば、その二つの分節はさらなる検討を要すると思われる。しかるに、フロイトは、幼児期より後に生じる「よるべなさ」のうちの少なからぬ数について、幼児のよるべなさの延長ないし反復の問いを立てている。それは、今しがたの引用にみられるとおりであり、また、成人の宗教的

態度を論じるところで「パラダイム」として機能する「よるべなさ」をA・シュニヴァントが強調しえたことに示されているとおりである。したがって、相当数の「よるべなさ」が二つの幼児期の「よるべなさ」の分節という問題へと関連づけられる、いやむしろ、その分節を中心にしてある問題が広がっているということになる。

ただし、心的審級としての「自我」の「よるべなさ」に関しては本稿では探究を先送りすることにしたい。それは、一九二〇年以降のテキストではつきり（とはつまり、「エス」および「超自我」という概念とともに）現われる用例だからであり、むすびで述べるように、本稿ではそれらのテキストを扱うことがほとんどできないからである。フロイトがいう「自我」それ自体について理論と記述の分節の問いと発生との問いを立てることに注意を喚起して、先送りを正当化するだけにここではとどめたい。

## 二 「よるべなき幼児」と生物学主義の展開

前節でとりあげた著作群でフロイトは幾度となく幼児期のよるべなさに言及している。しかし「よるべなき幼児」という言い回しによって本稿で問題にするのは、そのもろもろの言及のうちの一部、つまり、欲求の解消としての充足にいたるまでの展開を明示する文脈をとまなう「よるべなさ」と、それが生じる場所としての「幼児」である。この「よるべなき幼児」は、一八九五年の「心理学草案」と一九〇〇年の『夢解と欲動運命』でもっとも明瞭に論じられ、一九〇五年の『性理論三篇』ではきわめて省略的に、一九一五年の『欲動節では、この定式の図式的な読解ののち、理論としてのその位置づけを確認し、またその理論構造を考察する。

今挙げたテキストの読解からは、よるべなき幼児の定式に関してそのどれにも応用できる図式を引き出すことができる。五つのテーマを指し示しながらその図式を呈示するならばこのとおりである。まず、空腹や渇きなどの身体的欲求の発生という前提がある。ついで、その身体的欲求をみずからでは満たしえないことをいうよるべなき、栄養供給などの形をとった外からの助けの介入、<sup>(9)</sup>その助けの結果として生じる欲求の解消あるいは充足、という三つの契機を指し示す命題がある。そして最後に、その充足体験がのちの充足の原型であること、換言するならば、それをそのままに再現しようとする動きが以降の生のあり方を多かれ少なかれ規定することをいう結論的な命題がある。

ここに拾いあげた諸命題が理論的であることをまず確認しよう。前提と三つの契機についての命題とは、もとを辿ればなんらかの観察にゆきつきうるかもしれないとしても、いずれにせよ、もろもろの具体的な記述からある程度の抽象化を経て定式化されているにちがいない。しかしそれだけではない。最後の反復にいての命題は、同じ意味で理論的であるのではなく、いつそう思弁的な性格をもっている。つまり、それは後年の出来事とその記述の可能性を前提することなくして定式化されえず、また、充足体験とその反復という二つの時間を含意しているかぎりにおいて、観察記述(とその抽象化)にもつづら基づくものでは決してない。にもかかわらず、それは、理論構築全体の意義にとって決定的に重要な命題である。というのも、そもそもフロイトが試みているのは心理学理論の構築であり、そして、よるべなき幼児の理論はその最後の命題とともに、ようやく、記憶という、心理学的と呼ばれる領域で広く扱われてきた問題のひとつの定式化に通じていることを示しうるからである。

さて、そのよるべなき幼児の理論構造を考察したいが、それに先立って、まず、生物学的言説と生物学主義という観点を導入しよう。以前から指摘されているように、フロイトは、みずからの探究が明らかにした

ものを生物学的な用語で呈示し、また実際に「生物学」という語を用いることがある。たとえば、彼いわく、神経症の発症に関わる三つの要因のひとつである「生物学的要因は、人間の幼児の長引いたよるべなさ<sup>20)</sup>と依存性」である。本稿で生物学的言説と生物学主義と呼ぶのは、そうした言辭を含む言説と、そうした言説に表れているなんらかの生物学的知見に訴えようとする態度である。また、この呼び方に関して、次に引用するものをはじめとするいくつかの研究を参考にして、ここに明記する。

少なからぬ数の読者たちにとって、フロイトの生物学主義は、既存の学問領域たる生物学に訴え、依拠する態度にほかならない。そして、よるべなき幼児の理論はその態度に関して、唯一のではないにしても、問題にすべき重要なケースのひとつである。二、三の例を引こう。P・エメシエルは一九六五年の書物で、一八八〇年代前半にフロイトが解剖学の研究に利用していた研究所の所長であったマイネルトの仕事に注目している。それは、外界の知識の獲得に対応する大脳皮質の過程を研究し、とくに、個体が諸欲求をみたすために外界をどのように利用するかについて、空腹の乳児における吸い方の学習を例にとりながら論じた仕事である。エメシエルが総合的に判断するところによると、よるべなさと充足体験の理論を含む、一八九〇年代から一九〇〇年代前半にフロイトが展開した理論的思索は、神経機能についてのマイネルトの基本的な考えから脱していないのである。F・J・サロウエイは、そのよく知られた著作のなかでエメシエルの結論を引き受け、さらに、一九一〇年代以降の仕事においてもフロイトが生物学的用語と「生物学」の語をときおり用いていることを指摘しながらそれを拡大し、心理学者フロイトとは「隠れ生物学者」<sup>21)</sup>にほかならないと総括している。フロイトの理論は、実際のところ、フロイトが心理療法と心理学の道本格的に歩み出す以前に学んだ自然諸科学の理論のブリコラーージュに存しているのである。ひるがえって分析家J・ラプランシュによるフロイトの生物学的言説の批判的読解のうちにはまったく別種の例が認められる。彼によれば、他者に向かう傾向を、生じた身体的欲求の直接的な結果として説明するかぎりにおいて、フロ



イトの生物学主義は「性欲動の内因主義」<sup>(24)</sup>を含んでいる。そして彼自身が構築するのは、その種の態度を排除した精神分析理論である。つまり、それは、母子のあいだで生じるトラウマ的出来事として誘惑を措定し、その出来事を契機として発生するものとして性欲動を規定する<sup>(25)</sup>。かくして、その試みは、心的生の始まりを可能にするものとして他者の介入を十全に分節化し、起源論と他者論を同時に完成させようとするものになっている。

では、よるべなき幼児の理論の構造を、生物学的言説と心理学的分節の取り合わせという観点から考察しよう。つまり、この理論においては、欲求の出現からその解消、そしてその反復までの過程が、その二種の言説において同時に呈示されるとみなす観点である。今しがたみた読解もその観点を利用していると言える。すなわち、それらによるならば、よるべなき幼児の理論は、心理学的言説の外見をもつ生物学的言説に存している、あるいは、生物学的言説を（不当にも）ともなう心理学的言説に存しているのである。だが、二種の言説が見出されることを、依然として、しかし別様に強調することも可能である。記述と理論の相互の位置づけと分節という問題を指摘することができた前節の概観を思い出そう。そのときには、よるべなき幼児の理論にその問題がもちこされたことを認めることができる。つまり、その理論は、記述に基づきうる諸命題と、それが意味するところからして記述のみに基づくということが決まない命題とからなっている。さて、生物学的言説は、充足とその反復とが同じ場で生じることを言い表すことを可能にしている。心理学的言説は、生に到来するある出来事がかつてのなにかの反復であると主張するための言葉遣いを提供している。二種の言説がどのように分節化されるかはまだ必ずしも明瞭でない。しかし、「よるべなさ」をめぐる記述と理論の分節の問題が、よるべなき幼児の理論の構築において生物学的言説と心理学的言説の分節の問題として翻訳されていることはすでに指摘できるのであって、また、そのかぎりにおいて、二種の言説の分節が明瞭でないとしても、その理論がそれらを取り合わせているのはその構造からしてであると見なしうる

のである。

### 三 「よるべき幼児」と生物学主義の転回

本節では、前節でとりあげたテキストのなかでもっとも初期に著された二篇、「心理学草案」と『夢解』を順に精読し、ついで比較する。そのことを通じて、二篇がそれぞれに呈示する「よるべき幼児」の理論のあいだに、生物学的言説の意義にかかわる差異を明らかにすることを試みる。

「心理学草案」は、一八九五年一〇月にフロイトが当時の友人フリースに宛てて手紙とともに送付した草稿である。導入部で述べられるとおり、それは、量とニューロンという表象を用いて「自然科学的な心理学」を構築することを企図している。その企図にしたがって、続く諸節でフロイトは、外的刺激と「内部の細胞要素」<sup>(26)</sup>に由来する内因性の刺激のそれぞれについて、受容と、受容にひきつづいて増大する（興奮）量を論じる。またニューロンを $\phi$ 、 $\psi$ 、 $\omega$ の三種に区別し、うち $\psi$ を「記憶の担い手、おそらく心的過程一般の担い手」<sup>(28)</sup>であるとす。さらに $\psi$ について下位分類を設ける。すなわち、外的刺激が到達するニューロン（ $\phi$ ニューロン）群から備給を受ける外套ニューロンと、内因性の伝導路から備給を受ける中核ニューロン<sup>(29)</sup>という分類である。

よるべき幼児の理論は、 $\psi$ ニューロンの二つのグループのあいだになんらかの連絡が成立することをいう理論として現われる。「充足体験」と題された節から二つのパッセージを引用しよう。

助けをもたらさしめる個体が、外的世界での特異的行為の作業をよるべき個体のために行ってやると、そ

のよるべなき個体は反射の仕組みを通じ、内因性の刺激除去に必要な働きを自分の身体内部において造作なく遂行することができる。この反射的遂行をもってこの全体が充足体験を体現しているが、これは個体の機能発達にとってきわめて決定的な帰結を有している。すなわち三つのことがゆ系に起こる。一、持続効果のある放散がなされ、「…」圧迫に終止符が打たれる。二、外套部において、ある対象の知覚に対応してひとつ（ないし複数の）ニューロンに備給が生じる。三、特異的行為に続いて誘発された反射運動の放散情報が、外套部の他の部位に入ってくる。ついでこれらの備給と中核ニューロンとのあいだに通道が形成される。<sup>(30)</sup>

こうして充足体験を通じ、「対象像と運動像という」二つの想起像と、衝迫の状態（衝迫状態）で備給される中核ニューロンの間に通道が生じる。「…」衝迫状態（衝迫状態）ないし欲望状態（欲望状態）が再出現すると、備給は二つの想起へも移行し、それを生気づける。欲望（欲望）によって生気づけられるのは、まずは対象の想起像のほうであろう。<sup>(31)</sup>

この理論によれば、まず起源の充足体験において中核ニューロンと外套部のニューロンのあいだに通道が形成され、以降、欲求があらたに生じるときにはその同じ通道が利用されて欲求の解消たる充足が目指されることになる。この理論は、起源的体験と後年の出来事を同様の仕方（同様の仕方）で表象する理論であって、たとえば、フロイトがここでいう外套部のニューロンは、起源的体験において、そしてそれ以降もつねに、外的世界の知覚に応じて備給されるニューロンなのである。

さて、『夢解釈』は一八九〇年代の終わりに執筆された書物であり、心理学的考察にあてられた第七章を最終章としている。「心理学草案」と比較したときにすぐに目につくのは、その章が、ニューロンという表象を理論構築の根本にしていないことである。よるべなき幼児の理論は異なる言葉遣いで呈示されており、

充足体験という出口に関しても同様である。該当箇所を引用するならばこのとおりである。

生の必要はまず、主要な身体的欲求の形式で装置に到来する。内的欲求が打ち立てる興奮は、「…」運動性のうちに放出を探し求める。空腹の幼児がよるべなく叫び、手足をばたつかせる。しかし状況は変わらぬ「…」。

転回が到来するのはようやく、なんらかの途を介して、幼児においては他からの助けを通じて、内的刺激を抹消する充足体験が経験されるときである。その体験の本質的構成要素は、ある知覚（ここの例では食物）の出現であり、その記憶イメージは以降、欲求興奮の記憶痕跡に関連づけられることになる。その欲求があらたに生じるやいなや、かの知覚の記憶イメージにあらためて備給し、知覚そのものをあらためて喚起しようとする、ようするに最初の満足の状況を再建しようとする心的な動きが、確立された結びつきによって生じる。そのような動きこそ、われわれが欲望と呼ぶものである<sup>③</sup>。

「欲求興奮の記憶痕跡」とある「記憶イメージ」の結びつきをいう命題は、充足体験とその反復が生じる場を言い表す（つまり生物学的である）と同時に、以降に生じるある生の出来事がかつてのある生の出来事の反復であると主張することを可能にしている（つまり心理学的言説の出発点となつている）。しかしながら、つづくパッセージとともに構成する文脈のなかに位置づけるならば、その言辞を、多くの未規定をともなつた理論的表象とみなして読み解くことができる。それは、とくに、起源的な時間における外的世界の問い、より具体的には、「記憶イメージ」の由来という問いを分節化せずに残しているかぎりにおいて未規定である。なるほど、つづく段落を読むと明らかのように、フロイトはこの書でも外的世界の問いを考慮している。つまり、反復をめざす心的な動きとしての欲望が充足するためには「外的世界から行われる、願望された同一性の確立」<sup>④</sup>が探し求められなければならないという命題においてその問いを明示している。しかし、

その二次的な時間について立てられた外的世界の問いを起源的体験に関して直接的に應用する可能性を初版の時点では示していない。それだけでなく、一九一九年の第五版の際に追加した注では、その外的世界の問いを追究するにあたっては「現実検討」<sup>(25)</sup>とその確立ないし発達という問いを中軸とする概念装置を利用すべきであることを指摘するにいたっている。換言するならば、フロイトは、起源の時間に関してその問いを應用するところではある迂回を経ることを明示的にこの注で提案したということである。

右にみた二つのテキストのあいだには数々の差異があるが、本節のまとめとしてそのうちのひとつをとりわけ強調しよう。よるべなき幼児の理論が、構造からして、生物学的言説と心理学的言説を併せもつことを前節末尾では指摘した。本節でみた「心理学草案」は、起源と反復の両方の時間について同一のニューロンの表象を練り上げようとする生物学的言説と、反復を主張する心理学的言説の連接の可能性を模索するという方向性を示している。『夢解釈』は、それと異なり、起源的体験の定式化と同時に、二種の言説が連接すると措定する。その上で、連接するとしてはたして心理学的言説と連接する生物学的言説はどのようなかという問いをあらたに提起する。端的に述べるならば、一九〇〇年のテキストによって、生物学的言説は、理論構築においてプロブレマティクをそれ自体で意味するものとしてあらたに位置づけられたのである。

## むすび

これまでの読解を振り返りながら、ひとつの仮説によって本稿を結ぶことにしたい。

ある観点からとらえなおすならば、よるべなき幼児の理論は、欲望ないし願望（*der Wunsch*）、あるいは表象の力というものを、生の経済<sup>(26)</sup>のなかで示し表わそうとするものである<sup>(26)</sup>と言える。そのとき、生物学的言説は、そうした努力を一貫して支えているある態度、ないしある理論的決断を標すものとして現われ

る。おそらく、フロイトによる「生物学」への依拠は、既存の学問領域としての生物学の知の参照を意味しうるだろう。だがそれはつねに同時に、心理学的言説によって十分に言い表しえないものも、いずれにせよ、生の一環として表象しなければならぬという主張も意味しているのである。そして、右にみたように一九〇〇年の『夢解釈』によっては、その後者の意味が決定的に優先されたのである。

一八九五年と一九〇〇年のあいだには、「生物学主義の転回」、より精確にはその転回の始まりを認めることができるだろう。「心理学草案」と『夢解釈』の刊行年を考慮したい。前者がフロイトの死後の一九五〇年に初めて出版されたのに対して、後者は一八九九年に公刊され、以降、加筆修正されながら版を重ね、また、フロイトの他の著作において何度も参照の対象になっている。本稿第三節で触れたように、その後年の仕事は、一八九五年と一九〇〇年のあいだにみられる理論構築上の差異をさらに明確にしてゆきながら、その「転回」の完遂にむかっていったように思われる。

よるべきなき幼児の理論は、記述されたよるべきなきから、ある心理学的な場所の問いと、ある生物学的な場所の問い（あるいは、フロイトがいうところのメタ心理学の局所論的問いと、精神分析的な身体の問い）とを同時に引き出すことを許すひとつの仕掛けとして機能するという仮説を今後の探究に向けて呈示しよう。そしてその仮説とともにいくつかの課題を標定しておきたい。ひとつとして、外的世界の問いをめぐるフロイトの議論、とくに一九二〇年の『快原理の彼岸』におけるトラウマについての所論や、外的危険に保護なく晒されることとしての「よるべきなき」の含意を大々的に展開する一九二五年の『制止、症状、不安』の諸命題を読み解いてゆくことが重要になるだろう。もうひとつとして、数々の「よるべきなき」の記述から数々の「よるべきなき幼児」の発見までをテキストのうちに具体的にたどることは興味深い作業となりえよう。本稿を通じて練り上げた仮説は、いわゆる応用精神分析をも視野にいれながら心と身体の問いについてのフロイト的探究の可能性を追究するための仮説としての意味をそこにおいてもちうるはずである。

註

- (1) 本稿は、二〇一〇年六月八日に東京大学駒場キャンパスで行われたUTCPCレクチャーでの発表を基にしている。なお、以下ではフロイトの著作について、書誌情報を挙げるときに末尾の参考文献表中に記した略号を用いる。また適宜、執筆年を記し、執筆年が不明である場合は出版年でもって代える。年の確定は次に準じる。Gerhard Fichtner, Ingeborg Meyer-Palmedo (eds), *Freud-Bibliographie mit Werkkondensat*, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1999. 引用に際しては邦訳とくに『フロイト全集』(岩波書店、二〇〇六年)を大いに参照したが、文脈に応じて一部に変更を加えた。
- (2) 次のコンコードانسでは、GW中の登場箇所すべてを一覧表のかたちで知ることができる。以下で登場箇所を問題にするときにふじねにこれを参照する。Samuel A. Gutman et al. (eds), *Konkordanz zu den Gesamten Werken von Sigmund Freud*, Ontario, North Waterloo Academic Press, 1995. 本稿では「[hilfos]」および「[Hilfslosigkeit]」に字義的に対応するものとして「[hilflos]」および「[hilflosig]」を用い、語の形態を問題にするときにのみ原語をあらためて記す。
- (3) 本稿の第一、第二節で挙げる文献を参照。
- (4) GWを参照。
- (5) SEのタイトルを参照。
- (6) 本段落の論述にあたりとくに次を参照する。Jean Laplanche, Jean-Bertrand Pontalis, « Déresse (état de) », *Vocabulaire de la psychanalyse*, Paris, PUF, 1967; Jean Laplanche, André Bourguignon et al., *Traumatic Freud*, Paris, PUF, 1989; Alexandrine Schnieewind, « La déresse dans l'œuvre Freudienne : une figure de depression originaire », Catherine Chabert et al., *Figures de la dépression*, Paris, Dunod, 2005. また、当時の辞書として次も参照する。Jacob Grimm, Wilhelm Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, München, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1991 [1877]. ただし、フロイトがある著作で引用している版 (GW XII, p. 236を参照) と同一ではない。
- (7) Alexandrine Schnieewind, *Ibid.*, p. 43を参照。
- (8) *Ibid.*, p. 56sq., p. 68sq. 本文中に引用した三つの語句と、つづいて引用する「個体的パラダイム」と「社会的文化的パラダイム」も同様にこの箇所から。
- (9) GW XIII, p. 137sq.を参照。
- (10) 歴史上に存在した諸科学との関連でみた精神分析の実践と理論の位置という論点が本稿の議論の中心にないことと、記述と理論という本稿での区別が、まずは、一方が他方に還元しえないという基本的な読みに基づいていることもここで注記したい。二つめの点には本節のこの先でも触れる。

- (11) GW XIV, p. 337.
- (12) GW XII, p. 249.
- (13) GW I, p. 204.
- (14) GW V, p. 124.
- (15) GW XIII, p. 283. 引用はすべてこの箇所から。思弁的というテクニクの位置づけに関して次を参照。GW XIV, p. 85.
- (16) GW XIV, p. 345. 引用はすべてこの箇所から。
- (17) GW XIII, p. 252sq. を参照。
- (18) 本節を讀む箇所として「心理学草案」と『夢判断』に関しては次節の引用を参照。他の三つに関しては次を参照。GW V, p. 124, X, p. 212sq., p. 227 n. 1, XIV, p. 169sq., p. 199sq.
- (19) 「欲動と欲動運命」と『制止・症状・不安』では、助けの介入について、ひとつの契機よりはむしろ複数の契機を想定させる言い回しを用いられている。本稿注一八で挙げた箇所を参照。
- (20) GW XIV, p. 186.
- (21) Peter Amadée, *Freud's Neurological Education and its Influence on Psychoanalytic Theory*, New York, International universities press, 1965, p. 58, 65, 67 を参照。
- (22) Frank J. Sulloway, *Freud, biologist of the mind*, New York, Basic Books, 1992 [1979], p. 116 n. 7, 120, 203, 495 を参照。
- (23) *Ibid.*, p. 3, 419.
- (24) Jean Laplanche, *Problématiques VII. Le fournoisement biologisant de la sexualité chez Freud*, Paris, PUF, 2006 [1993], p. 68.
- (25) たよえは次を参照。Jean Laplanche, *Nouveaux fondements pour la psychanalyse*, Paris, PUF, 1994 [1987], « Trois acceptions du mot 'inconscient', dans le cadre de la théorie de la séduction généralisée », *Sexual. La sexualité dirigée au sens freudien*, Paris, PUF, 2007.
- (26) GW Nachtragsband, p. 387.
- (27) *Ibid.*, p. 397.
- (28) *Ibid.*, p. 392. 同様に p. 401 も参照。
- (29) *Ibid.*, p. 408 を参照。
- (30) *Ibid.*, p. 411. 「充足体験」に付した傍点は、原文のイタリックに対応。その他の傍点は引用者による。
- (31) *Ibid.*, p. 412. 傍点は原文のイタリックに対応。
- (32) 執筆時期について諸説は必ずしも完全に一致しないが、脱稿（とくに第七章のそれ）が出版の直前であることは、フリース宛の書簡中の言葉から知られている。次を参照。Sigmund Freud, *Bréve an Wilhelm Fliess 1887-1904. Ungedruckte Ausgabe*, Jeffrey Moussaireff Masson, Michael Schröter eds.), Frankfurt am Main, S. Fischer, 1986 [1985], p. 393sq.



- (33) *GW* II-III, p. 571. 傍点は引用者による。
- (34) *Ibid.*, p. 572.
- (35) *GW* II-III, p. 572 n.1. 注の追加が行われた時期に関して次を参照。SE IV, p. 566.
- (36) 表象の力動を論じる理論のすべてがそうであったわけではないことは、歴史的にみて明らかである。たとえば一九世紀前半のドイツの心理学者 J・F・ヘルバルトの次の仕事を参照。Johann Friedrich Herbart, » *Psychologie als Wissenschaft*. Neu gegründet auf Erfahrung, Metaphysik und Mathematik. Erster synthetischer Theil « [1824], *Sämtliche Werke* V, Darmstadt, Scientia Verlag Aalen, 1989.
- (37) 同書は当時の出版社によって一九〇〇年と先日付られた (SE IV, p. xii を参照)。

#### 参考文献

- Peter Anshacher, *Freud's Neurological Education and its Influence on Psychoanalytic Theory*, New York, International universities press, 1965
- Gerhard Fichner, Ingeborg Meyer-Palmedo (eds), *Freud-Bibliographie mit Werkkonkordanz*, Frankfurt am Main, S. Fischer Verlag, 1999.
- Sigmund Freud, [SE] *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud* (James Strachey ed. tr), London, Hogarth press, 1953-.
- \_\_\_\_\_, [GW] *Gesammelte Werke*, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1960-。『フロイト著作集』人文書院 一九六八年 『フロイト全集』岩波書店 二〇〇六年
- \_\_\_\_\_, *Brigle an Wilhelm Flügge 1887-1904*, Ungedruckte Ausgabe, (Jeffrey Moussacoff Masson ed., Michael Schöter ed of the German edition), Frankfurt am Main, S. Fischer, 1986 [1985]。 (『フロイト ノーレスの手紙』河田晃記 誠信書房 二〇〇一年)
- Jacob Grimm, Wilhelm Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, München, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1991 [1877].
- Samuel A. Gutman, Stephen M. Parrish, John Ruffing, Philip H. Smith Jr. (eds), *Konkordanz zu den Gesammelten Werken von Sigmund Freud*, Ontario, North Waterloo Academic Press, 1995.
- Johann Friedrich Herbart, » *Psychologie als Wissenschaft*. Neu gegründet auf Erfahrung, Metaphysik und Mathematik. Erster synthetischer Theil « [1824], *Sämtliche Werke* V, eds Karl Kehrbach, Otto Flügel, Darmstadt, Scientia Verlag Aalen, 1989.
- Jean Laplanche, *Nouveaux fondements pour la psychanalyse*, Paris, PUF, 1994 [1987].
- \_\_\_\_\_, » *Desaire* », André Bouguignon et al., *Traduire Freud*, Paris, PUF, 1989.
- \_\_\_\_\_, *Problématiques* VII. *Le fourvoiement biologique de la sexualité chez Freud*, Paris, PUF, 2006 [1993].
- \_\_\_\_\_, » *Trois acceptions du mot « inconscient » dans le cadre de la théorie de la séduction généralisée* », *Sexual. La sexualité dargie au sens freudien*, Paris, PUF, 2007.
- Jean Laplanche, Jean-Bertrand Pontalis, » *Déresse (tar de -)* », *Vocabulaire de la psychanalyse*, Paris, PUF, 1967. 『精神分析用語辞典』村上仁監訳 みち

す書房、一九七六年)

Alexandrine Schniewind, « La déresse dans l'œuvre freudienne : une figure de dépression originale », Catherine Chabert *et al.*, *Figures de la dépression*, Paris, Dunod, 2005.

Frank J. Sulloway, *Freud, biologist of the mind*, New York, Basic Books, 1992 [1979].